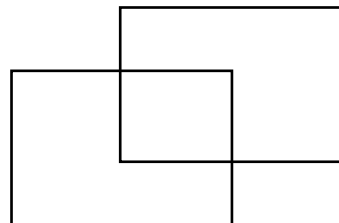


トノサマバッタ

相地 満



子どもたちは群れ遊びを楽しんでいた。近隣の子どもたちが広場に集まり、それぞれの年齢にわかれて、なおかつ群れて遊んでいた。遊びに夢中になりながらも異年齢の子どもたちが仲良く、うまく遊んでいるのを気かけながら遊んでいた。怪我でしようものなら、まず年長者が心配をして駆けつける。悲しむ子をほっておくということがなかったのである。一人残らず地域の子たちはすべてが仲間である。その連帯感は強く、温かいものであった。なにかあると年長者の責任が問われた。みながその責任感を共有していた。

草むらに出かけていくと、まずはバッタ採りである。広い草むらにそっと近寄り、みんながそろそろと一斉に草むらに駆け込む。これまで静かに草を食んでいたバッタは驚きあわてて飛び立つ。種々のバッタが飛び立つ。色・形・大きさ…。みなさまざまである。飛び立ち、飛行する距離もみな違う。大きい子どもたちは高く飛翔し、長く飛び続けるバッタを必死になって追いかける。その速さは意外と速いのである。一定の広がりをもつ草むらであってもそれを横切り、はみ出してしまいそうになる。そんな時にはよくできたものでバッタは草むらから離れていくことはない。草むらのはずれ近くになると大きく方向を展開し旋回する。追いかけてくる子どもたちの付近に近づくのである。その時が捕まえるチャンス。網などあえて使わない。バッタが着地するところへ飛び込み両手でしっかりと抑えるのである。大きなものは後肢を跳ね返す力が強い。そこでつい捕まえたものを手放してしまうこともしばしばであった。大きなバッタを捕まえると大喜び。その輝くような緑の宝石、しかも大きく持ちごたえのある宝物を我が手にすると震えるような触感を覚えたものだ。

バッタの大きさは大小さまざま。また色も緑色系と褐色系のものがある。それらは四角く、がっしりとした体つきをしている。ほかのバッタの仲間には細長く華奢なものがある。この仲間にも大小さまざまあり、大きくて代表的なものはショウリョウバッタである。翅を広げると結構な大きさになる。それと同じような形で二回りほど小ぶりになったものにショウリョウバッタモドキがいる。飛び立つとき、体を擦り合わせてキチキチという音を出すのでキチキチバッタと呼ばれることもある。ほかに、大きなものと小さなものが二頭がいつもおんぶしていて草の葉にとまっているものがある。仲の良いこのバッタはオンブバッタと呼ばれている。小さいもの、いつもおんぶされているものがオスである。

四角くしっかりとしたバッタはトノサマバッタである。美しい体に草むらの模様を擬態したかのような長い羽根を広げて大きく飛び立つ。だがこの仲間をよく見ると各種あることがわかる。クルマバッタ・カワラバッタなどである。それぞれにしっかりとした体を持ち、王様バッタの風格を持

つ。中でも大きくしっかりして美しいのがトノサマバッタである。食料として食べた草の量によって大きさに変化がもたらされる。食料になる草の種類は主にイネ科植物である。ゆえにイナゴと並ぶイネの大害虫である。トノサマバッタには群れ集って大被害を与えるものと、ごく少数で被害を与えるものがある。幼虫時代からの成育歴に原因があるように思えてくるが、あながちそうとも言えない様相を示している。群集をつくり、食べつくし、移動している集団内の個々の体はひ弱な感じで、体色は鈍く薄い褐色に近い色をしている。雄の胸辺りは、確かに緑色をしているが色あせている。かわりに一頭で、あるいはごく少数で生活しているものの体つきは硬く、強く、跳躍力も強い。そして頭部や胸を中心にして鮮やかな緑色をしている。集団化し、退色したものの警戒心や行動力は鈍くなり、群れに追従的になる。か弱いものが大きな集団をつくって、あらぬ力量を誇示しようとする。一方、荒野で一頭、これから仲間を作って行こうとするものたちの注意力や警戒心はきわめて強く、峻厳である。自らを護る力がこれからつくる仲間の結束力を高めていく。同じ種のバッタに生まれても、かくも違う生き様をしなければならぬ。命とは、いかに過酷な運命の帰結を迎えることか。鮮やかに命を煌めかせて、奥深い緑を湛えて峻厳に生きる様相を持つ少数者の相を孤独相という。孤独相を持ったものたちの生き様と生き抜いた証が今日トノサマバッタの繁栄を築き上げて来た。大群をつくり、右往左往、盲従・妄動し、餌という餌すらすべてを食べ尽くし、地に生える草が一つもない。草原の砂漠化をおし進め邁進して滅びの道を開いたものたちの相、それを群集相という。群集相を持つ種の爆発的な繁栄は、そのまま種の絶滅・消滅に強力に導かれていく。生存へのたくさんのヒントを抱え込みながら生命は個別に選択する道を選んできた。

バッタが大集団をなし食餌しながら移動するとき。またそのバッタやトノサマバッタ・サバクバッタなどの個体数が極めて多くなると行動や形態が変化し、飛蝗(ひこう)となる。飛蝗は、農作物に壊滅的な被害を与える。中国やアフリカなどで突発的に発生する。現在、モーリタニアで発生した飛蝗が東南アジア・中国大陸を席卷し、史上まれに見る大被害を与えている。インド洋を襲う気候変動や地球温暖化の激化に伴い異常な事態を引き起こしている。中東を大きく回り込み、中国大陸に猛烈な勢いで襲いかかっている。

大地は長い年月の後、草原化した。草原化した大地は、そこに生態的なバランスをとりつつ森を形成した。水・光・空気は、草原を育んだ。草原は、草食性の動物や芽や実を食べる昆虫を多産した。また鳥や恐竜の繁栄をもたらせた。それぞれに生態系を大きくはみ出してした後、極端に増殖した生き物達は減んでいった。

バッタはどうか。バッタを主たるエネルギー源とする生き物が出てこないかぎり、自然の生態系をはみ出し、やがて滅びの道を歩む。ときあたかも昆虫食が世界的なブームになりつつある。日本にも古来からの特色を持つ昆虫食文化がある。それは現在さかんに見直されている。またそれよりも安易・安価な東南アジアの昆虫食文化が入っている。釣り合いの保てる日が来ることを願う。

こぼれ話・1 バッタのオリンピック

草むらで群れ遊ぶ子どもたちは、それぞれにやっとの思いで捕まえたバッタを持っている。種類・雌雄・大小せつかく捕まえたバッタを大切に持ち、大喜びである。中は苦勞して捕まえたバッタをつい逃がしてしまう。そんなときは落胆する。だがすぐに気を取り戻して新たに捕まえようとする。それが逃がしてしまったものよりも種類がしっかりとして、大きなものであれば大もうけである。子どもたちは広場の真ん中に小さな円を描き、その中に集まる。片手にバッタを持ち、もう一つの手には釘を付けた紐を持っている。それぞれの釘を地面に打ち込み一斉に「せーの！」の掛け声のもとにバッタを空高く放り上げる。勢いよく放り上げられたバッタは落下する途中で羽根を広げて飛び立つ。どの方向へ飛ぶか、どこまで飛ぶかは皆目わからない。子どもたちは自分のバッタが飛ぶ方向を見失わないように必死で追い掛ける。バッタには直線的に飛ぶものがあるかと思いきや、ジグザグに蛇行して飛ぶものもある。ある一定程度飛ぶと着地する。それを見失うわけにはいかない。着地と同時にバッタを再捕獲するのである。思いっきり飛び続けたバッタは、疲れているのか動作はにぶい。再捕獲はさほど難しいことではない。着地点に紐を置き、そこで切り取る。釘を刺した出発点から紐を切った着地点までがそのバッタの飛行距離である。その長さを図り、それぞれを比べて一番よく飛んだバッタを表彰する。繰り返し競技するが、三回程度が限度である。なかには飛べなくなってしまったバッタが出てくる。飛んでも短距離になってくる。またどこかへ飛んで行ってしまう再捕獲ができなくなる場合もある。そこで「バッタのオリンピック」は終了する。大きいバッタも小さいバッタもみなそれぞれ平等に参加できるという楽しいゲームである。生きているバッタを続けて二日・三日と競技させようとしたが二日以降、どういうわけかバッタは飛べなくなる。「せーの！」で一斉に放り上げてもみなそのまま地面に落下する。バッタのエネルギーは、もはや絶えてしまっているのだ。

こぼれ話・2 ツチイナゴ

トノサマバッタ型のバッタにツチイナゴがある。形は実にトノサマバッタに似ている。クルマバッタ・カワラバッタなどにも似ているので、はじめは何だろうと思うことも多い。あえて言えば体が軟弱で弱弱しく見えるので羽化したばかりのものと思うがそうでもない。大きさが実にバラバラである。色も模様も形も同型なのだが、サイズが生育のステージを無視してさまざまに違っている。大きなものもあれば小さなものもある。大きさは極端に違うが、それぞれがすべて成虫である。生き物のサイズはかなり厳密に規格通りに収まっている。ツチイナゴのような例外もある。だが何故そのようなことが起こりうるのかその原因は定かではない。摂取できた食草の種類や量に関する値が大きいと思われる。

<採集と飼育>

採集は草むらや草原にいる個体を見つけて捕虫網ですくうのが一般的である。

キリギリス類の捕獲にキュウリを方形に刻んだものを草の葉などにぶら下げておく。そこにとどまり、キュウリを食むものを捕まえるという方法が古くからよく知られているがトノサマバッタなどではどうであろう。トノサマバッタは飼育下において確かにキュウリを食む。だが自然界におけるトノサマバッタはおもにイネ科植物を食べている。飼育下においてもやはりそうなのではないかと思う、ちぎったり、むしったりしたイネ科植物の乾燥はすばやい。そこで保水量の多いキュウリなどをさかんに食むのではないだろうか。

昔、ペットショップには「絹糸草」と呼ばれるイネ科植物の種が売られていた。栽培下でそうだったのではないかと思うが、背丈もごく短く、見るからに柔らかく昆虫が好んで食みやすそうな草地をつくる。細かい種がいっぱい入った袋もお値打ちで、食植性昆虫の飼育用餌にぴったりであった。あの「絹糸草」の種子販売がいまも行われているとしたらトノサマバッタ類の飼育にもってこいではないか。だがその懐かしい「絹糸草」のびっしり生えた茂みも、種子も、種子がいっぱい詰まった大袋も、今はすっかり見られなくなった。

<繁殖>

都市には、草むらがなくなった。土の部分がなくなったと同時に。街路樹や公園樹を育てるための植え柵すらごく狭い面積に追いつめられている。先日、ビルの工事現場を見学していたら何と建物周辺を取り巻く植え柵にすら土中深く水が浸透する土が存在している訳ではない。植栽する樹木の大きさに合わせて巨きなポットが埋め込まれ、そこに土を入れ、木が植えられているのである。土中、土の部分はそのコンクリート柵の中にほかから持ち込まれた土が入れてある。ただそれだけのことである。驚いた。いずれ巨木になるだろう大樹が根をしっかりと張る土でさえ、自然のものではなく人造のものなのである。水・土・空気という自然の循環は、もはや人工的なシステムの中でしか機能し、働き続けることはできなくなった。見た目、自然風に見えることが本当の自然なのだろうか。恐ろしく根源的な反自然が<見た目の自然>になり変わっている。草むらもそうである。グリーンにおおわれた、見た目の快さの中で生き物はどう生活すればよいのだろうか。種の存続を果たしていけるのか。大自然の摂理のなかで、あてがわれた生命の連鎖を断ち切り、無力な反自然の中にもはや、身を任せてはいけないはずだ。やがてそれは壮絶な窮乏を呼び、危機に陥る。

群れ飛び、移動し、食い尽くし、草原を荒れ地と化し、そして自ら滅亡していくバッタたち。それは明日こそ我が身に降り注ぐ人間の禍に似ている。それをバッタたちは、予見し、予告している。

PHOTO gallery



1. トノサマバッタ
2. クルマバッタモドキ
3. オンブバッタ
4. ショウリョウバッタ
5. ツチイナゴ